

## 人工栽培によるホンシメジの産地化を目指して

名称：おおくま未来合同会社（代表執行社員 はたがわ 畑川 けいせい 恵成）

所在地：双葉郡大熊町

### 【大熊町の避難指示解除状況】

・居住制限区域、避難指示解除準備区域、帰還困難区域とも未解除

### 【プロフィール】

帰還町民が農業に従事できる環境づくりを目的に平成27年2月に設立。県単事業でホンシメジの栽培に取り組み、震災後初めて大熊町から農産物を出荷・販売。

### 【震災前の経営と避難状況】

震災前は、主に建設業を営んでおり、原発事故によりいわき市内を初めとする県内へ避難。その後、大熊町内の除染作業に従事。

### 【設立の経緯】

大熊町内の農業再生と帰還する町民が農業に従事できる環境づくりを目的に、有志8名が平成27年2月に「おおくま未来合同会社」（以下、「合同会社」という。）を設立。事業内容は、農畜水産物の生産・加工・販売、農畜水産物の生産に係る作業受託など。

### 【取組の内容】

平成28年3月、町内居住制限区域である大川原地区の除染後農地2haを借りて、ナタネを播種。5月に開花し、景観保持と共に一時帰宅町民に癒しを提供し、同時に放射性物質のナタネへの移行調査も実施しました。その後、「大熊エネルギー・メガソーラー発電

所」の太陽光パネルが設置され、合同会社が施設敷地内の保全管理（年3回除草）を請け負っています。



代表執行社員 畑川恵成さん（右）とホンシメジ部会長 増子四郎さん

平成29年1月に新聞記事で、福島県林業研究センター（以下、「林研センター」という。）がホンシメジの生産技術を確立したことを知り、ホンシメジを栽培できないか、直接、林研センターに問い合わせたのが始まりです。その後、平成29年度の県単事業「福のしま『きのこの里づくり』事業」に応募して、事業者の一つに採択されたことから、ホンシメジ「福島H106号」の栽培に取り組むこととなりました。

ホンシメジはマツタケと同様、生きた樹木の根と共生して育つ「菌根性」

のため、人工栽培が難しいとされてきました。新品種の「福島 H106 号」は、林研センターが長年にわたり人工栽培に適した品種を選抜し、生育条件を研究してきたもので、自然環境下で菌床栽培することができるため、温度・湿度の調整施設が不要で、施設費用が安価に抑えられるメリットがあります。



ホンシメジ栽培ハウス

大川原地区の社員有地に県の助成を受けて簡易ハウス（5.4m×9m）3棟を建設し、平成29年10月上旬に、栽培のための菌床パレットを準備しました。具体的には、プラスチックパレットに菌床ブロックを置き、その上に鹿沼土を敷き詰めるもので、菌床パレット375個を作成しました。発生まで湿度を保つ必要があることから、パレットへの散水のほか、地面にミストチューブを設置して高湿度を保つ工夫をしました。

11月上旬に待望の芽が出始め、放射性物質検査で安全を確認した後、郡山市内のホテルに高値で販売されました。畑川さんは、「約1か月間、芽が出てくるか毎日不安だったが、芽が出て

きた時は感動した」と語ってくれました。



鹿沼土で被覆した後の菌床パレット

原発事故後、大熊町産の農産物が出荷・販売されるのは初めてで、販売先の郡山市内のホテルのシェフからは、「香りが非常に良い。天然のホンシメジの香りに近い。」と好評価を得ました。

#### 【関係機関の支援】

社員全員がきのこ栽培は初めてでしたが、「福島 H106 号」の栽培に当たっては、林研センターや富岡林業指導所からきめ細かな技術指導を受けることができました。また県単事業では、NPO 法人「素材広場」が販路の開拓、マッチングを担い、県内ホテルへの販売を確保したほか、試食会を開催して県内料理人へホンシメジの美味しさを PR しました。

#### 【課題】

今回の初めてのホンシメジ栽培では、予定していた収穫量に届きませんでした。今後は、安定した発生となるよう、栽培技術の確立を図る必要があります。



ホンシメジ人工栽培での発生

販売先については、現在の県内ホテルに加えて、首都圏のホテル・レストランなどへ拡大していく計画で、ホンシメジの品質の高さをPRしながら地道に販路を開拓していく予定です。

#### 【目標・将来構想】

ホンシメジ栽培を定着させるためには、生産から販売までのビジネスモデルを確立することが目標となります。ホンシメジの栽培管理は、軽作業で比較的容易なため、高齢者でも栽培可能です。小ロットでもコンスタントに出荷・販売できれば、ハウス一棟の規模でも一定収入を得られる作物となっています。

現在、ホンシメジのハウス栽培は、11月～12月の2か月程度を予定していますが、栽培期間を3か月～4か月に延ばすことで、長期間の安定した出荷を目指しています。さらに、施設の有効利用の観点から、夏季にキクラゲなどを栽培することも検討しています。



ホンシメジの計量

将来、避難指示が解除されて町民が帰還し、農家が営農を再開する時、みんながいっしょになって栽培に取り組む作物が必要であり、畑川さんは、「ホンシメジがその一つになって欲しい。栽培が軌道に乗ることで、帰還する町民も増えるはず。」と期待しています。将来、ホンシメジを産地化して町の特産品にすることが目標であり、「これからは若い人が会社勤めと同じような感覚で農業をやる時代になる。ホンシメジ栽培の技術を次世代を担う若い人に継承していきたい。」と語ってくれました。

(平成30年1月)